

彼の信奉者により裸にされた「前衛」としての書きことば、さえも Written words as “advengarde” stripped bare by his followers, even

阿部 明典[†]

Akinori Abe

[†] 千葉大学 文学部行動科学科/ドワンゴ人工知能研究所

Division of Behavioral Science, Faculty of Letters, Chiba University/Dwango Artificial Intelligence Laboratory
ave@ultimaVI.arc.net.my, ave@L.chiba-u.ac.jp

Abstract

According to the Ogawa's (one of organizers of this OS) definition, “Advengarde” means “very unique, outstanding, and a knowledge structure and an emotion of expression receiver are greatly moved.”

In this paper, I will discuss written words as “advengarde” according to the above definition. Especially, I will discuss how written words are sophisticated and experienced in novels or poems. Then I will discuss the possibility of an automatic generation of written words as “advengarde.”

Keywords — 前衛, 書き言葉, 映像

1. はじめに

本セッションを企画している小川 有希子さんによれば、前衛とは、

「先頭に立つ部隊、最前線、先駆的」という字義を持つ一般用語であるが、これを意味する「アヴァンギャルド」というフランス語が日本においても芸術や文化の文脈では普及しており、これは実験的な創作を試みた作家群や作品群を指す、思想的なニュアンスを含んだ言葉である。本セッションにおける「前衛」は、その正統な意味合いを基調としながらそれを敷衍し、何らかの点で「異彩を放つ・際立つ」要素・側面を持った表現、「並ではない」効果を生じさせる表現の全てを、議論の射程に入れる。

という定義がなされている。つまり、「前衛」を「異彩を放つ・際立つ、表現の受け手の知識構造や情動が極めて大きく揺り動かされる」と定義している。

本論文では、その定義に従って、「前衛」としての書きことばに就いて議論を行う。特に、小説や、詩などに於いて、どのように書きことばが使われ、洗練されているかに就いて議論を行い、更に「前衛」として

の書きことばの機械的生成の可能性に就いても議論したいと思う。

2. 小説は書き方次第??

いい音楽は第一楽章から.... というコピーがかなり前のサントリーのCM で使われていたと思うが、いい小説も、大体は冒頭からひきこまれる。誰もが暗記している夏目漱石等の文豪の作品は別格としても、最近の作品でもそのような作品は存在する。作家は、冒頭にかなり力をいれているか、作品の伏線を色々入れていると思われる。特に、それがいい作品であれば。以下に幾つか、私が惹き込まれた作品に於いて、その書き言葉に就いて示す。

2.1 千早 茜: 男ともだち, 文藝春秋 (2014)

色とりどりの泥に埋もれていた。

それが、夢だとわかるくらいには覚醒していた。泥は混じり合いながら模様を描き、私は色の乱れる鮮やかな夢をとろとろと愉しんでいた。

時折、色はくっきりとしたかたちをあらわした。その度に...

「かたちをあらわした」の部分がひらかなになっている。次の「たび」が「度」になっているにも拘わらず。この小説はここ以外は普通の漢字遣いになっていると思う。漢語を和語にすることで、少し柔らかい表現をしたのであろうか? それとも、もやもやした感じをひらかなで表現したのであろうか? ここでの主体は12行後になんとか、女性であることがわかる。それもやや問題を抱えていそうな女性なのである。直木賞は西加奈子の800ページの大著「サラバ」に譲ったが、惹き込まれる表現だと思う。ちなみに、この作家は、以前、「魚神 (集英社 (2009))」で泉鏡花賞をとっ

たが、その冒頭は、以下のようにねっとりとした語感をも感じることができる。

この島の人間は皆、夢を見ない。

島の中ほどにある小さな山の上に朽ちかけた祠があり、そこに棲む獺が夢を喰ってしまうのだ。島に住む人々の心は虚ろで、その夢はあまりに貧しいため獺はいつも飢えていて、島の灯りに惹かれ訪れた客人の束の間の惰眠ですら、その餌食になってしまう。

でも、私は知っている。獺などいないことを。

そのせいかは分らないけれど、私は月に一度夢を見る。

月に一度、私の体が水で満たされる時、私の意識は夢の浅瀬をたらたらと彷徨うことができる。遊女の勤めの休みをもらい、じつくりと重い体を引きずって床につく。数日は水ばかりしか口にしない。やがて、全身が水の膜で覆われたようになり、外界の音や空気や流れ、人の声音に潜む感情の起伏といった全ての波動が感じられるようになってくる。下半身で疼いている痛みも、血の流れが刻む小さな音に同化していく。全身がわんわんと響きだし、全てに繋がる大きな流れに溶け込んでいく。

一見、普通の書き方のように見えるが、「たらたらと」、「じつくりと」、「わんわんと」のようなワザと入れた？ ひらかなが、この情景の雰囲気支配している。基本的に漢字の多い記述であるが、その中に一部ひらかなを混ぜることで、特殊な雰囲気を醸し出していると思う。内容も普通ではないが.... そのような内容にはこのような記述が合っているのではないだろうか？ これを異常な物語を淡淡と普通に書かれるとそっちの方に違和感を感じられると思われる。

2.2 江國 香織: ヤモリ、カエル、シジミチョウ, 朝日新聞出版 (2014)

● 拓人視点の文章

23 (pp. 242)

たくとはひびはっけんする。トンボはにひきでくっついているとき、たくとをむしする。ほんとうにかれはにそっくりなガがいる。

● 大人の視点

24 (pp. 246)

最中は、ばさばさしていて上手くのみこめない。奈緒は甘い柚子茶—最中同様、中川倫子が持ってきてくれたものだ。お湯を注げば...

● 大人に近づきつつある？

35 (pp. 384)

拓人は幼稚園の庭で、列にならんでいる。なぜならんでいるかはわからないが、ならばされたのでならんでいるのであった。うしろの子がしょっちゅうよろけて拓人にぶつかるので、

この小説では、拓人は、昆虫とお話ができて、その時は、子供の時であり、子供の時の記述は、ひらかなで書かれている。大人 (拓人以外の家族等) の視点には、ほぼ使うべき漢字が使われている。中途半端に漢字が使われているのは、中途半端に成長していることを表していると思われる。やや実験的な試みではあると思われるが、江國の意図的な記述であると思う。漢字以外でこのような記述はできるのであろうか？ 日本語の場合は、漢字とひらかなの混成で出来るが、アルファベットしかない場合はどうであろうか？ 日本語は、複数の種類の文字があり、その使い分けで感性を表している。例えば、カタカナは冷たい、ひらかなは柔らかいなどのイメージが日本人には共通にあり、それを効果的に使うことができる。読者は、そのような記述の差異で様々な妄想を抱いたりもする。

3. 固定されたイメージは想像力を妨げる??

本節では、Franz Kafka (カフカ) の小説を用いて、メディアによる表現の違い、鑑賞者の受容の違い等に就いて議論する。その比較により、書きことばの前衛性が浮き彫りにされると思う。

カフカの「Die Verwandlung (変身)」は、様々なメディアで表現されている。不条理を扱った実存主義文学の最高峰の一つであると思われる。それだけに、様々な表現を試みたくなるのであろう。Albert Camus (カミュ) の「L'Étranger (異邦人)」とともに、多くの人が暗記していると思われるカフカの「変身」の冒頭部分は、以下の通りである。ドイツ語の原文 (カフカはチェコ人ではあるが、本はドイツ語で書いている) で示す。

Als Gregor Samsa eines Morgens aus unruhigen träumen erwachte, fand er sich in seinem Bett zu einem ungeheuren Ungeziefer verwandelt."

Franz Kafka: *Die Verwandlung*, Vitalis (2011)

主人公 Gregor Samsa が寝ている間に変身した主体は、“einem ungeheuren Ungeziefer” という物体? で

ある。これに関しては、色々な表現があると思う。上記で引用したチェコで出版されているドイツ語の本では、絵は、間接的表現にとどめている。巻末の注釈に毒虫の絵は載っているが、表紙には、虫の成虫を描くことで、間接的に変身を示唆している絵(図1)がある程度である。更に、小説の中ではりんごがぶつけられて床に落ちている絵しかない。“物体”の絵は一切無いのである。



図1 本の挿絵

一方、チェコで出版されている劇画のようにも見える絵本 Franz Kafka (Václav Fatařík illustration): *Proměna*, Garamond (2009) では、最初のページに小説では描かれていない変身する前の日常生活、寝に入った所が描かれていて、ページをめくると、布団の中に毒虫がいる絵となっている。更に、表紙から毒虫の絵(図2)、それも結構えげつない絵が掲載されている。読者は、表紙の時点ですでにかなり、変身した主体のイメージをコントロールされると思われる。更に、この絵の場合、直截に視覚情報としての毒虫が入っているが、これ以上の展開はない。しかし、“*einem ungeheuren Ungeziefer*” のままにしておくと、読者は、徐々に毒虫に対する印象を変えていくことができる。例えば、りんごがのめり込むのか.... とか。劇画の方は pp. 53 に背中が割れてりんごが体の中に入っている絵があるが、私が昔“日本語訳”で読んだときの印象は、めり込んでいるという感じであった。そして、やはり、一番大きいのは、いきなり朝の場面を迎えるのと、その前の生活の説明がある場合の読み手の印象の違いだと思う。前置きがあると、どうしても、そっちの方にまず流されるので、あれっという感覚はなくなる。確かに、彼のことで後ほど、変身前の状況は何となくわかるのであるが、衝撃感という意味では、いきなり朝でないと薄れてしまう。

さて、我々日本人に馴染みやすい日本語訳を見てみ

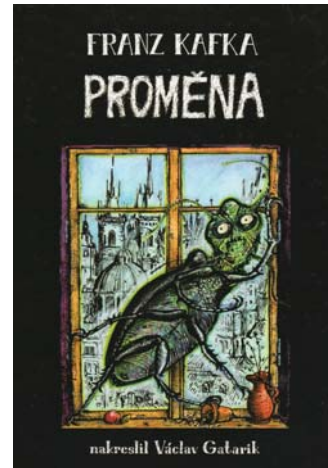


図2 毒虫の絵

る。新旧二つ、冒頭の部分の翻訳を示す。

ある朝、グレーゴル・ザムザがなにか気がかりな夢から目をさますと、自分が寝床の中で一匹の巨大な虫に変わっているのを発見した。

高橋義孝訳: 変身, 新潮文庫 (1952)

グレゴール・ザムザがある朝のこと、複数の夢の反乱の果てに目を醒ますと、寝台の中で自分がばけもののようなウンゲツィーファー(生け贄にできないほど汚れた動物或いは虫)に姿を変えてしまっていることに気がついた。

多和田葉子訳: 変身, 『すばる』2015年5月号 (2015)

前者は、かなり前に訳されており、定着している訳であると思う。私も昔この訳で「変身」に触れた。ここでは、「巨大な虫」と訳されている。

後者は、これまで様々な翻訳があるに関わらず、新たに翻訳を行ったものである。多和田は、“*einem ungeheuren Ungeziefer*”を語源まで辿って括弧に括って注釈のように訳している。彼女によれば、「ザムザが共同体のために自分を生け贄にし、過労死に向かっていったのが、汚れた姿に変身することで自由になった」を意味するように訳したようである。上記の劇画では普通の生活を送っている、そして、仕事に明け暮れているザムザの前画面があったが、前置きを作ることなく、翻訳によりザムザの変身前の状態を示そうとしているのである。読者がここまで理解できるか、やや危険な賭けであるが、文字だけで表現しようとなるとどうなるのかも知れない。注釈のような訳がやや美しくないかも知れないが、読者に解釈の自由を与えるとい



図3 Metamorphosis by Edward Watson

う意味では、劇画よりいいかも知れない。

映像としては、the Royal Opera House で March 2013 に収録された Edward Watson が Gregor Samsa 役をし、Arthur Pita が振り付けをしているものが BluRay で出ている。こちらは、被り物をせずに、人間が演じている。色は黒っぽくついているが、異形ではないので、えげつなさはやや和らぐ。過去にもドイツの劇団がジャングルジムのような舞台上で演じた作品等のように、色々な形で上演されてるが、人間が演じている時点で、毒虫としては、やや弱くなるように感じる。しかしながら、我々は、既に持っているイメージとしての毒虫を重ね合わせて見ていると思う。従って、異形ではない人間が演じているとはいえ、心の中では、自分の毒虫を描いて見ている。その意味では、被り物を着てイメージを固定化するよりいいと思われる。どちらかという、文学に近くなると思われる。

一方、雑誌等で写真でしか見ていないが、平田オリザ演出のアンドロイド版「変身」もある。こちらは、毒虫ではなく、ロボットにある朝変身していたというストーリーのようである。ロボットは阪大の石黒さん制作のものである。

劇のホームページには、「私たち人間は、明日、虫になっているかもしれない不条理な存在である。私たち人間は、自らアンドロイドとの区別を証明することもできない不条理な存在である。」と書いてある。不条理性をアンドロイドと人間すら区別できなくなるという近未来的な視点で捉えているのであろう。

ある人のページ (http://kinsentansa.blogspot.jp/2014/10/blog-post_13.html) を見ると、『ある日起きると、いきなりアンドロイドになっていたグレゴール。本人は次第にその状況を受け入れ始めるが、家族はなかなか受け入れられない。それでもアンドロイド(物)になったグレゴールと会話を重ねていくうちに、その状況を徐々に受け入れていく。家族がアンドロイドになってしまったグレゴールの顔をいとおし

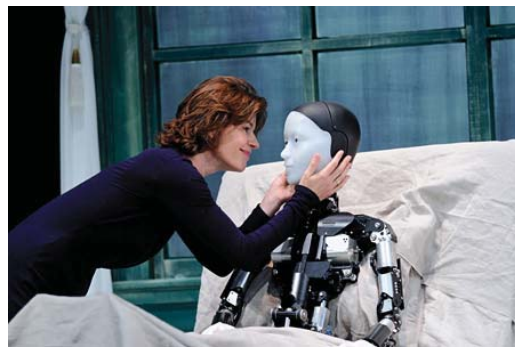


図4 アンドロイド版「変身」

そうに撫でたり、寄り添ったりする。最後にグレゴールは家族に「電源を切ってくれないか?」と頼むが、家族は電源を切れなかった。』と書いてある。

この劇の場合、最初からベッドにロボットが横たわっている訳で、聴衆はロボットを常時見ている。その点では、イメージの拡張性はないが、ロボットと人間関係を描き出すというか、考えるには面白い設定なのだろうと思われる。残念ながら、私は、これを見ておらず、二次的資料から推測をしているので、もしかしたら、間違っているかも知れない。

余談かも知れないが、これくらい有名で素晴らしい作品になれば、引用のように使ってくる小説もある。変身譚なら、勿論、使ってみたくなる。使い方によっては、失敗する可能性大であるが、以下のはよさそうである。

山内マリコ: 悪夢じゃなかった?, in かわいい結婚, 講談社 (2015)

ある朝、澤村裕司が夢から目覚めたとき、自分の体がベッドの上で、一人の女に変わっているのに気がついた。寝返りを打ってうつぶせになると、胸がつかえて苦しく、なんだか尻がぼったり重い。布団にくるまっているのに手足の末端が冷えきって、凍えるように寒かった。

体の温かい部位に手を入れて暖を取ろうと、脇の下をまさぐった瞬間、おやっ? と思う。この感触は胸ではなく、むしろ、“おっぱい”ではないか?

「ん?」

それほど衝撃的な書き方ではない。一日女性として過ごし、別れかけているミツコの実情を女性の姿で知り、最後は、澤村が女装を好きな男となり、ミツコと結婚するというたわいのない小説ではある。しかしな

がら、カフカの「変身」を思わせる冒頭を読んだ読者は、ふふーんと思ひ、先を期待する。

ちなみに、表題の、「かわいい結婚」の中では、力士の声のマネをするひかりの言葉をまる文字で表現している。女の子が力士の声のマネをするとう状況をフォントで表している訳である (pp.36)。このフォントのイメージとしては、力士というよりは、可愛らしい感じであるが、もしかしたら、力士のマネをしている可愛い女の子というイメージを狙っているのかも知れない。丸いというイメージと太っている力士かも知れないが、このまる文字は可愛らしいになると思う。

文字によるイメージなら、平安時代に遡る。和歌を筆で芸術的に書くのもそうであるが、葦手などの絵に文字を埋め込む遊びもある。更に、現代では、LINEのスタンプにデコメの代用となっているものがあるが、これについては、本論文のテーマを逸脱するので、ここでは議論しない。

4. 性別をどう表す??: イメージは、楽しさを妨害する?

本節では、Manuel Puig (プイグ) の「El Beso de la Mujer Araña (蜘蛛女のキス)」を題材に扱うことにより、表題の議論を行う。

—A ella se le ve que algo raro tiene, que no es una mujer como todas, Parece muy joven, de unos veinticinco años cuanto más, una poco de gata, la nariz chica, respingada, el corte de cara es... más redondo que ovalado, la frente ancha, los cachetes también grandes poro que después se van para abajo en punta, como los gatos.

—¿Y los ojos?

—Claros, casi seguro que verdas, los entrecierra para dibujar mejor. Mira al modelo, la pantela negra del zoológico, que primero estaba quieta en la jaula, echada. ...

Manuel Puig:

El Beso de la Mujer Araña, Vintage Español (1994)

「少し変わってるの、そこらの女とは、ちょっと変わってるのよね。まだ若い感じ、二十五を越えたぐらいかしら、顔は小さくて猫みたいで、鼻はつんと上を向いて、かわいくて、顔の輪郭は.....丸いというよりは卵形かな、額は広くて、頬はふっくらとしてて顎



図 5 Molina by William Hurt (Kiss of the Spider Woman)

の先はとんがっているのよ、猫みたいに」

「目は?」

「明るい色よ、確か、緑だったと思う、絵を描くために細めていたわ。モデルをじっと見つめていたのよ。モデルは動物園の黒豹。黒豹は初めは檻の中でおとなしく寝そべっていたわ、.....」

プイグ/野谷 文昭訳:「蜘蛛女のキス」, 集英社 (1983)

スペイン語は、“お勉強して”とか、“食事しよう”程度の知識しかないの、日本語訳も掲載しているが、こちらでは、[5] や [6] で議論されているような、女ことばというか、オネエことばを使っている。当然、私は、昔、翻訳で読んだ。“ホモセクシャル”と帯には書いてあるが、帯がなければ、性別を間違って読んでいた可能性はある。スペイン語では、おそらく、女性名詞などを使うことにより、日本語訳で見られる効果を出しているのではないと思う。この本では、色々な映画をレビューできるというメリットもあるが、性別を隠していることが面白さの一つになっていると思われる。

この作品は非常に人気があり、劇として上演されたり、映画化もされている。例えば、図 5 は、Hector Babenco 監督の映画であり、その中で William Hurt がスパイである Luis Molina (名前も女っぽい) を演じているところである。なんとなく、オカマっぽい恰好 (ステレオタイプ??) をしている。

映画では、普通の女とは違う女性として話は進んでいくが、William Hurt が演じているので、まあ、なんとなくオトコなんだろうなあということは、わかるであろう。ミュージカルでも上演されているが、男性が演じているので、同様だと思われる (私は見ていないのでこれ以上は言及できない)。

いずれにせよ、姿を目で見えしまうと、騙されもしないし、イメージの広がりも無くなる可能性は高

い。この小説は基本的に同性愛の本であり、騙された方が面白いのであろう。そういう意味で、日本語訳は成功しているのではないであろうか？ 映画や劇でも、Molina がずっと客や聴衆に背を向けていると、色々な想像が出来て面白いかもしれない。

5. 前衛としてのことばの実験

5.1 詩と(しての)イメージ

20 世紀のあたりから小説や詩では様々な実験が行われている。例えば、視覚化された詩で一番有名なのは、図 6 に示す Guillaume Apollinaire の “Le colombe poignardee (刺殺された鳩)” であろう。これは、calligrammes と言われているものであるが、鳥の形に詩を書くことで、詩の持つイメージとしての視覚を伴う芸術になっている。前節まではイメージの固定化が読み手の自由を奪うという議論をしていたが、ここでは、イメージの固定化が有効に働いている。鳩に関する詩なので、鳩の形が見えていても問題はない。それ程精緻な絵でないところがいいのかもしれない。その下には、泉 (噴水) も続くのであるが、文字が水の如く散らばっているという感じである。文字に水の躍動感が加わったという感じである。泉というイメージには、形には様々あるかも知れないが、例えば、水が湧き出ている、吹き出ているというその概念的なものには、余り個人差もないと思われるし、あの程度の精度であれば、あっても、想像の邪魔にはならない。更に、先ほど書いたように、文字に Kinetic Art のような躍動感を与えることができるというメリットの方が大きい。

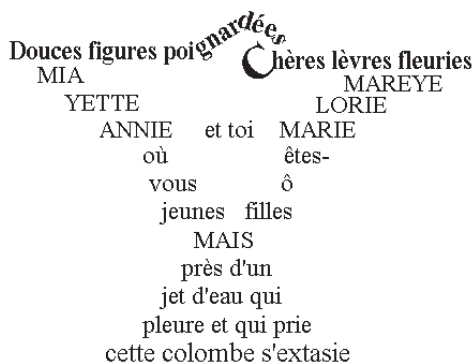


図 6 Le colombe poignardee by Guillaume Apollinaire

Allen Ginsberg による Poem Rocket は、図 7 に示すように、タイトルがロケットの形をしている。更に、内容自体も、以下に示すように、カットアップのよう

な感じである。

Moon politicians earth-weeping and warring
in eternity
tho not one star disturbed by screaming
madmen from
Hollywood
Oil tycoons from Romania making secret
deals with flabby green
Plutonians—

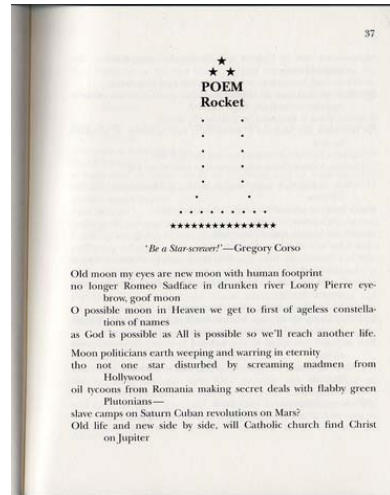


図 7 Poem Rocket by Allen Ginsberg

読者は、ロケットの絵 (発射前であろうか？ 灯台のように見えなくもない www) とともに、ロケットのようなリズムの詩を読むのである。前節でイメージがあると思考が停止するようなことを書いたが、前と同様、アスキー絵のような精度の低い絵により、イメージが限定されていないというか、この絵自体も書き言葉として機能しているのだと思われる。これだけではなく、彼は様々な実験的な詩を書いている。

アートとしては、artist book のようなものが存在する。それは、本に挿絵のような絵を入れているものである。場合によっては、独立した絵となっていることもある。絵だけでも楽しむことが出来る。従って、詩や小説をはずして、絵のみが売られることも少なからずある。そういう意味では、絵の方が尊重される artist book である。

例えば、Yves Tanguy は Yvan Goll の Le Mythe de la Roche Percée にエッチングを 3 枚つけているが、そのうちの 1 枚 (図 8) は、詩 (岩) の説明と思われる前書き

Les falaises de la Roches sont lisses et si
verticales, que leur ascension est interdite

par une loi communale. A marée haute, elle forme une île, battue par les vagues. A marée basse, on peut en faire le tour à pied sec. L'océan grignote la pierre incessamment et a déjà foré une "arche" d'une vingtaine de mètres de hauteur, sous laquelle les bateaux peuvent passer. De là son nom: Roche Percée.

を描いているように思われる。Tanguy の作品は、間違っても具象画とはいえない。その意味では、挿絵としては見られないと思われる。双方ともシュールリアリストであるが、そういう意味で、シュールの合体となっているのかもしれない。確かに、詩で描かれている情景のような絵が描かれているように見える。ここでは、詩の理解の参考にはなるが、イメージの固定には至っていないように思われる。“骨”だらけの Tanguy の作品としてしか見ていない。



図 8 An etching by Yves Tanguy

そして、詩の本編?は、以下のように始まる。

I

Roche

Née de l'Oeuf de la Tempête

Aux temps des migrations de la pierre

Alors que l'Aghri-Tagh lui-même

Ouvrait à peine la première aile d'après-déluge

Pamir un citronnier entre les dents glissa sur le toboggan

de l'océan

Et l'océan descendit l'escalier d'une Cordillère

Dans les ravins sacrés de Crête les dieux dormaient

L'Oural ne dressait pas ses poings de neige

Mais Elbrouz souffrait dans sa chair

Des mêmes pyrites que sa soeur Ande

L'Appalache avait ses crampes d'anthracite

Roche Percée

Quelle terreur te fit geler dans les bras du Labrador

Appelant en vain au secours avec tes milliers de fossiles

Entre Malbaie et la Baie des Chaleurs

かなりシュールな詩であり、絵はややイメージの固定化に役立つ可能性もある知れないが、それほどでもない。詩の鑑賞の邪魔は余りしていないと思われる。シュールな絵を使ったところが良いのかも知れない。作った方はそんなことは関知せず、アートとして作ったと思うが。鑑賞者もアートとして鑑賞していると思われる。そして、絵のみはずして売られていることが多いところを見ると、もしかしたら、詩はあまり読まれていないかも知れない...



図 9 An etching by Zao Wou Ki

Zao Wou Ki (趙無極) が le Club Français du Livre のために、エッチング(図9等)を数枚つけた Arthur Rimbaud の Illuminations に関しても同様である。

Après le Delugé

Aussitôt après que l'idée du Delugé se fut rassise,

Un lièvre s'arrêta dans les sainfoins et les clochettes mouvantes et dit sa prière à l'arc-en-ciel à travers la toile de l'araignée.

Oh! les pierres précieuses qui se cachaient, — les fleurs qui regardaient déjà.

Dans la grande rue sale les étals se dressèrent, et l'on tira les barques vers la mer étagée là-haut comme sur les gravures.

Le sang coula, chez Barbe-Bleue, — aux

abattoirs, — dans les cirques, où le sceau de Dieu blêmit les fenêtres. Le sang et le lait coulèrent.

Les castors bâtirent. Les “mazagrans” fumèrent dans les estaminets.

Dans la grande maison de vitres encore ruiselante les enfants en deuil regardèrent les merveilleuses images.

洪水の後¹

洪水の記憶が覚めやらぬ頃

一匹の兎がイワオウギとツリガネ草の繁みの中に立ち止まり、くもの巣の合間を通して虹に祈りを捧げた

おお 隠れてしまった宝石よ — ほころんだ花々よ

汚れた道には露店がたてられ、船が海のほうへと引かれていく、何重にも重なりあい、まるで版画を見るようだ

屠殺場バルブ・ブルーでは家畜の血が流れ、広場の家々の窓には神の恩寵が青ざめている血とミルクが流れた

ビーバーが巣を作った。居酒屋ではコーヒーの湯気がたった

大きなガラス張りの家の中では喪服の子どもたちが巨大な絵を見つめている

これには、Wou Ki 特有の印象風景画みたいな絵がついているのであるが、詩のイメージ固定には働いていないと思われる。Illuminations は有名な詩で、様々な言語に翻訳されており、詩だけでもかなり読まれていると思われる。又、詩自体も強烈なイメージを持っており、よく読まれているとは言え、一瞬では理解はできないイメージの塊である。上記に使ったようなイメージの強い詩は、非常に強い個性を持ったことばが使われており、多少の絵があっても影響はされないが、例えば、「大きなガラス張りの家の中では喪服の子どもたちが巨大な絵を見つめている」をイラストとして入れた場合、子供や巨大な絵に対するイメージは固定化されるかも知れない。このように、書きことばにイメージをつける場合は、抽象的なものもいいのかも知れない。そして、ことばと絵は、詩に対する理解とイメージの構成に関して互いに強めあうと思われる。

¹日本語訳は <http://poesie.hix05.com/Rimbaud/Illuminations/illuminations02.deluge.html> から

5.2 広告の中のことば: 特にテクニカルな

広告のことばに関しては、他の文献で何回か言及しているが、前衛的なことばという位置づけで再議論する。

本田翼を起用して以来、ここ3年くらい復活しているが、スキーの人気の衰退と共に、かなり長い期間休んでいた広告である。去年は、広瀬すずを起用し、キャッチとして、「答えは雪に聞け」を採用していた。大学生協で、「答えは生協に聞け」等とパクっているくらい、キャッチには影響力があったが、歴代のキャッチの中で、1999年のもの(図10)は、ことば工学的に面白い。吉川ひなの(写真では切れている)を使っていたが、広告の下の方には、「愛に雪、恋を白」というキャッチがある。「会いに行き、恋をしろ」の漢字を入れ替えることで、イメージのふくらみというか、スキーは、恋人と行く、もしくは、スキー場で恋人を見つめる²という当時の感覚を入れている。このような凝ったキャッチは作るのが難しいのか、余り例はないと思われる。



図10 JR SKI SKI から



図11 大手前大学の広告

又、図11に示す例は「共学」と「驚愕」を掛けた例である。女子大が共学になったので、男女驚愕というストーリーである。このように、日本語の場合、このようなことば遊び的レトリックが比較的容易に出来る³。

²リゾラバということばもあったが...

³同様に漢字を持っている中国語も出来るかも知れない。筆者は中国の広告は調べていないので、よく判らないが、実際、彼らは新



図 12 諺を使った広告の例



図 13 「春はあげもの」の広告

日本語のような表記や読みの違いを有効に使えない欧米の広告は例えば、図 12 のように、諺をベースにしたものが多いと思われるが、それに近い広告として、2015 年 2 月くらいに電車の吊広告などにあった、井川遥が出ているサントリー角ハイボールの広告(図 13)がある。この広告のキャッチは「春はあげもの」であるが、枕草子の「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。」をベースにしていると思われる。簡単なレトリックではあるが、印象に残るし、やられたという気分になる。絵の中にメンチカツのようなものがあるが、このバージョンでは、太陽のようにも見える⁴。更に、「夏は夜が夏は酔うかあ、秋は夕暮れ(から呑む)、冬はつとめて(る人が呑む)あ、四季全部行けるんじゃん。」等と盛り上がるキャッチでもあった。

ここには、広告の中の印象に残ったことばを掲載したが、「心に残る名作コピー」(PIE (2012)) のようなコピーを集めた本があるように、広告でイメージに残るのは、やはり、ことばである。確かに、絵もインパクトがあると残るが、どんなに印象的な絵があっても、ことばがイマイチでは心に残らない。

年の蜜柑のように、幸せとか金と音が同じ食べ物を節目に食べたりする(例えば、「柑」は「金」と同じ発音で縁起のいいものとして中国正月に配られる)ので、可能性がないわけではないと思われる。

⁴他のバージョンは、円の形をしていない申揚げとアジフライなので、深読みかもしれない

ここで示したキャッチの計算機による生成の可能性については、[1] 等で議論しているが、ことばのズレを機械的に生成することで、面白いものができる可能性がある。沢山機械的に生成すれば、その中にいいものもあるというレベルではある。しかしながら、人間が思いもつかないものも生成でき、creativity の刺激にはなると思われる。

5.3 カットアップ (Cut-up text) の可能性

上記で、Allen Ginsberg のカットアップかもしれない詩を挙げたが、カットアップは偶然良いものができたりして、人間の意図や意思を超えた作品が出来上がる可能性がある。音楽にも chance operation という偶然性の音楽があるが、多くは楽譜の順番が変わるといった感じである。作曲家は一応、作曲はするのである。文学等のカットアップは新聞をばらばらにして並べ替えたり、既存のものをばらばらにすることで行う。それは、自分の作成したものでもいいし、新聞のように他人の創作でもいいであろう。考えてみると、Kristeva の言っている intertextuality (間テキスト性) [4] に従えば、全ての作品は、**a mosaic of quotations** となるので、上記のようなことを行っていることになる。但し、人間がきちんと構成すれば、恐らく美しい作品となる。そうでないと、カットアップという偶然の産物になる。

カットアップっぽいことを、例えば、[2] でしてみた。一つは、和歌のカットアップで、以下のようなものができた。5,7,5,7,7 で分けるとそれなりのものができたが、ここには、漢字こみで、4 文字に分けてカットアップしたものを示す。

- 三笠の山 じ今はた 山の峰に せもが露 山おろし
- 祈らぬも とづれて 関わたの て若菜つ を命にて
- るらむ誰 に雲がく る人にせ に朽ちな るも別れ
- かりほの 白妙の衣 がむれば 暮るるも がれつつ
- あらねど 龍田の川 あぢきな 猪名の笹 あだ波は

日本語として成り立っていないものもあるがなんとなく、刺戟的なものが出来上がっている。それどころか、「がむれば」や、「がれつつ」といった切れ切れとなったことばも、なんとなく理解してしまいそうである。ちなみに、5,7,5,7,7 に分割して再構築した和歌には、季節の制約とかいれなかったので、季節が混じってしまうという齟齬はあるが、美しいものも出来上がっていた。

- 初霜の 衛士のたく火の 奥山に つらぬきとめぬ 紅葉なりけり

もう一つは、尾崎紅葉の『金色夜叉』の冒頭部分:

未だ宵ながら松立てる門は一樣に鎖籠めて、
真直に長く東より西に横はれる大道は掃き
たるやうに物の影を留めず、いと寂くも往来
の絶えたるに、例ならず繁き車輪の軋は、或
は忙かりし、或は飲過ぎし年賀の帰来なるべ
く、疎に寄する獅子太鼓の遠響は、はや今日
に尽きぬる三箇日を惜むが如く、その哀切に
小き腸は断れぬべし...

をカットアップしたものである。結果は以下のよう
になった。

疎に寄する獅子太鼓の遠響は、或は忙かり
し、例ならず繁き車輪の軋は、いと寂くも往
来の絶えたるに、未だ宵ながら松立てる門は
一樣に鎖籠めて、或は飲過ぎし年賀の帰来な
るべく、はや今日に尽きぬる三箇日を惜むが
如く、真直に長く東より西に横はれる大道は
掃きたるやうに物の影を留めず、その哀切に
小き腸は断れぬべし...

上記は、和歌と違って、フレーズ単位での交換な
ので、文法としては間違っていないと思われるが、意味
を理解するのがやや難しい。しかし、頑張れば理解
の範疇かも知れない。遊びとしては、面白いが、偶然
の確率がかかなり低いと思われる。従って、アルゴリ
ズム的には、計算機向きの仕組みなので、大量に生産
して、その中からいいのを選ぶという戦略がいいの
かもしれない。

文学とは離れるが、電子メールのスパム戦術では、
ベイジアンフィルタの裏をかくためにランダムに発生
させたテキストが使われているらしい。そして、上記
でもそうであったが、偶然に文法的に筋の通った文が
作られることもありうるようである。それ仕組みを使
うと、作品ができるかもしれない。ちなみに、こうし
たテキストは *spamoetry*(スパム詩) または「スパム・
アート」と呼ばれている⁵。テキストは既存の本から
取られることが多いので、当然、カットアップと考
えてよい。出来上がった“作品”のなかで、あちこちに
引用されている例として以下のものがある。

Then, from sea to shining sea, the God-King
sang the praises of teflon, and with his face
to the sunshine, he churned lots of butter.

意味は、よくわからないが、なんとなく面白いも
のが出来上がっている。それは、上記の和歌にも通じ

るものである。つまり、意識、意図のないコンビネー
ションにより素晴らしいものができてしまったという
か、素晴らしいと我々が感じてしまう“作品”がで
てしまったのである。かつて、ダダ、シュールレアリ
スムで行われていた *descriptions automatiques* (自動
記述)に通じるものかもしれない。

6. まとめ

書きことば.... Saussure の言っている Signifiant と
Signifié に押し込んでもいいのであろうか? Signifiant
と Signifié には、固定した関係はない。従って、その
関係を色々変えることにより、様々な可能性が出てく
る。それは、時には、ダジャレであり、広告のことば
である。文学作品もそのような仕組みを崩して新しさ
を出すことがある。その場合、ことばだけであれば、
鑑賞者には、無限の可能性が与えられ、様々な解釈が
できる。ことばにイメージを足すこともあるが、本論
文で議論したように、害があることもある。

本論文では、書きことばの「前衛」的な素晴らしさ、
可能性を議論した。そして、その機械自動生成の可能
性も議論した。結論としては、機械的に多数生成し、
その中から人間が美しいと思ったものを選択するの
が、恐らく一番いいのではないのではないかと思う。
そこには、本当の *descriptions automatiques* が産ま
れてくるし、人間が思いもつかないものができあがる
可能性がある。Harold Cohen の Aaron [3] のように、
人間の作り方をインストールする仕方もあるかもしれ
ないが、それをするには、小説や詩をどう書いている
か等を、例えば、小説家や詩人が自分でアルゴリズム
化し、プログラムできないといけなかもしれないの
で、やや難しいと思われるし、出来た場合、画一化し
てしまう可能性がある。

最後になるが、人間の作る(書く)ことばは美しい
というのが、結論である。そして、それは、自由に受
容されなければいけない。

参考文献

- [1] 阿部 明典: 広告などにおける感性つきことばの概念
ベースによる生成の可能性, 第 59 回情処全大, Vol. 2,
5N-04, pp. 397-398 (1999)
- [2] 阿部 明典: 小説の生成に就いて, 人工知能学会研究会資
料, SIG-LSE-A903-16-8, pp. 129-134 (2010)
- [3] McCorduck P./下野 隆生訳: コンピュータ画家アロー
ンの誕生—芸術創造のプログラミング, 紀伊國屋書店
(1998)
- [4] Kristeva J.: Desire in Language: A Semiotic Ap
proach to Literature and Art, Columbia University
Press (1980)
- [5] Maree C.: 「おネエことば」論, 青土社 (2013)
- [6] 中村 桃子: 翻訳がつくる日本語, 白澤社 (2013)

⁵Wikipedia とか、<http://www.synthtopia.com/content/2008/09/22/cutup-generator-creates-aleatory-text/> にや
や詳しい説明がある。